



Data

監督・脚本: ジュリアン・シュナーベル

出演: ウィレム・デフォー / ルパート・フレンド / オスカー・アイザック / マッツ・ミケルセン / マチュー・アマルリック / エマニュエル・セニエ / アンヌ・コンシニ / ウラジミール・コンシニ / ロリータ・ジャマー / ディディエ・ジャール

👁️👁️ みどころ

1888年10月に南仏のアルルで「耳切り事件」を起こしたゴッホは、精神病院に収容された挙句、37歳で不遇の死を！その死亡は事故、それとも自殺？それすらハッキリしないから、天才画家ゴッホの生存中は不幸の連続・・・？

そんな通説に自分自身も画家であるジュリアン・シュナーベル監督は異論を唱え、本作で新視点、新解釈を！それによると、ゴッホの死は『At Eternity's Gate』になるわけだが、それは彼の「イエスでさえ死後に認められたのだから」の言葉に集約されている。

そのことへの賛否を含め、あなたの視点をしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「ゴッホ映画」は多いが、こんな新視点、新解釈も！■□■

フィンセント・ファン・ゴッホの「伝記映画」は、カーク・ダグラス主演の『炎の人ゴッホ』(56年)や、ロバート・アルトマン監督の『ゴッホ』(90年)等、たくさんある。それに対して、中国映画『世界で一番ゴッホを描いた男』(16年)は、1万人を超える画工がおり、毎年数百万点の油絵が世界中に売られているという深圳の大芬という油絵村を描いた面白いドキュメンタリー映画だった。また、私が興味を持ったのは、ゴッホの死因を尋ねる「探偵もの」としての『ゴッホ～最期の手紙～』(17年)『シネマ41』未掲載。同作最大の特徴は、全編「動く油絵」で構成したことだった。しかし、ゴッホはホントにオーヴェルで自殺したの？もしそれが事実だとしたら、彼はなぜ自殺を？もちろんそれは誰にもわからないことだが、自らも画家であるジュリアン・シュナーベル監督は、本作で「ゴ

ッホ自殺説」に対する大胆な異説を展開しているので、それに注目！

どんな分野であれ、有名人、偉人を主人公にした映画は「紋切り型の伝記」になりがちだが、シュナーベルが本作を監督するについて何よりも避けたかったのは、それ。そのため、彼の制作チームはまず、「伝記映画を作るつもりも、ゴッホに関して散々論じられてきた疑問に答えるような映画を作るつもりもなかった」と述べ、そして「我々が心を惹かれたのは、ゴッホは晩年、自分が新しい視点で世界を見ていることにしっかりと気付いており、他の画家とは違った方法で絵を描いていたことだ。ゴッホは新しい視点で物事を見ることを人々に伝えようとしていた。我々はその新しい視点を描きたかったんだ」と述べている。なるほど、なるほど。

シュナーベルは70～80年代にわたって画家としての揺るぎない名声を享受し、90年代に突然映画監督になったという経歴の持ち主だから、ゴッホの生き方に対するこだわりは尋常ではないらしい。そこで彼は、「自分が画家であるということが、映画への取り組み方に大きく関係していると思う。本作のテーマほど、私にとって個人的なものはない。これまでの人生で私がずっと考えてきたものなんだ」とも語っている。私たちは、そんな彼の思いと、本作における彼の新視点、新解釈をしっかり理解し、受け止めたい。

■□■同業者たちと過ごすパリのサロンの居心地は？■□■

『人間失格 太宰治と3人の女たち』(19年)では、口ではいつも「死ぬ、死ぬ」と言いながら、なかなか実行しない新進の作家・太宰治が、意外にも同業者が集まるサロンの中で人気者になっており、さまざまな議論をリードする姿が描かれていた(『シネマ 45』131頁)。その中でも親友・伊馬春部と交わす文学論が面白かった。また、『FOU J I T A』(15年)(『シネマ 37』未掲載)では、日本からパリに渡った日本人画家・藤田嗣治がおかっぱ頭、ロイド眼鏡、ちょび髭、ときにピアスの画家FOU J I T Aとして、モデルのキキや新しい彼女のユキ等の女たちに囲まれて遊び呆ける姿が面白かった。

それらに対し、19世紀末のパリの画壇に集まっている多くの画家たちのサロンの中で、ゴッホはうまく彼らに溶け込めなかったらしい。その最大の理由は、彼の作品が同業者たちにはもちろん、画商たちにも全然評価されなかったためだが、それとは別に、ゴッホの人間性(コミュニケーション能力?)等にも問題があったらしい。ゴッホはなぜ「耳切り事件」を起こしたの?また、その後もなぜ発作が続いたの?それについては、てんかん説、統合失調症説、梅毒性麻痺説、メニエール説等数多くの仮説があり、てんかん説と統合失調症説が有力らしい。したがって、ゴッホにとって同業者たちと過ごすパリのサロンの居心地は悪く、ゴッホが孤独感を味わっていたという本作前半の描き方はシュナーベル監督の新視点、新解釈ではなく、これまでの通説通りだ。

そんなゴッホに話しかけ、彼の親友になったのが同じ画家仲間のパール・ゴーギャン(オスカー・アイザックだが、なぜ彼らは気が合ったの?)

■□■陰鬱なパリVS光のアルル。なぜ「黄色い家」に？■□■

フランス南部にあるアルルという地名は、ジョルジュ・ピゼーの組曲『アルルの女』によって日本人にも有名だが、実際のアルルを知っている日本人は少ないはず。ヨーロッパは基本的に日本より寒い国で、イギリスのロンドンはもちろん、フランスのパリ、ドイツのベルリン等の冬はかなり寒い。その上、中国の北京と同じように、内陸部の都市だ。それに比べて、イタリアのローマやスペインのマドリードは温かいし、海に近いから風も爽やかで、太陽の光も明るく温かい。だからこそ、アラン・ドロン主演のフランス映画『太陽がいっぱい』（60年）は、フランス映画ながら、その舞台はイタリアのローマと、ナポリの近くにあるモンジベロという小さな漁村だったわけだ。ちなみに、ロシアはヨーロッパ以上に寒く陰鬱な国だから、『寒い国から帰ったスパイ』（65年）というタイトルが実にピッタリ。それはともかく、日本人にとってパリは「花の都」だが、オランダ人の画家ゴッホにとって、パリは「陰鬱なまち」だったらしい。

ゴッホが自分の絵の中に常に求めたのは新しい光。しかし、陰鬱なパリではそれを見ることができなかつたため、ゴッホはそれを作品に描き出すこともできず、いつもイライラしていたわけだ。そのためゴッホは1888年から南仏にあるアルルに移り住んだが、それはアルルが「フランスの日本」、すなわち、太陽が輝く中で太陽に向かって咲くヒマワリを思わせる国・日本と同じだと感じたためだ。したがって、ゴッホにとってアルルはパリと違ってユートピアだったが、よそ者でどこかうさん臭い(?)ゴッホに対して家主から法外に高い家賃を要求されたため、ゴッホは「黄色い家」を借りてアトリエ兼住宅として住み、そこで「ひまわり4点」「黄色い家」「夜のカフェ」等の多くの作品を完成させることに。

■□■60代のウィレム・デフォーが30代のゴッホを熱演！■□■

ゴッホは1890年に37歳で死亡(自殺?)したが、本作でゴッホに扮し、2018年の第75回ベネチア国際映画祭で主演男優賞を受賞し、第91回アカデミー賞の主演男優賞にノミネートされた俳優がウィレム・デフォー。1955年生まれの彼は既に60歳代だから、本来30歳代のゴッホを演じるのは難しいはず。しかし、スクリーン上のウィレム・デフォーは、それを見事に演じているからスゴイ。

それ以上に、私がビックリしたのは、彼は『プラトーン』（86年）にエアラス軍曹役で出演し、アカデミー賞助演男優賞候補になった俳優だということ。ベトナム戦争に対して鋭い問題提起をした『プラトーン』は第59回アカデミー賞作品賞を受賞した名作だが、同作でのエアラス軍曹の存在感は際立っていた。そんな彼が、本作では30歳代のゴッホを演じているのだから誰でもビックリする上、前述の賞にノミネートされるとは！

■ゴッホとゴーギャンとの共同生活は？耳切り事件は？■

ゴッホとゴーギャンとのアルルにおける共同生活が1888年10月23日から始まったのは、ゴッホがゴーギャンを招き、ゴーギャンがそれに応じたため。そして、「黄色い家」における絵画制作を中心とした2人の共同生活は、当初うまくいっていたらしい。しかし、いわゆる「価値観の不一致」によって2人の仲がギクシャクしてくる中、12月24日にゴッホがカミソリで自分の左耳を切り落とすという、いわゆる「耳切り事件」が発生したため、ゴッホは病院に収容されることに。

それが従来の通説だが、シュナーベル監督は本作でそれに異を唱え、ゴッホとゴーギャンは決して仲違いをしたのではないと言いたいらしい。その論拠の1つがゴーギャンの手紙だが、ハッキリ言って私にはゴッホとゴーギャンの仲がどうだったのかはどちらでもいい。また、なぜゴッホが自分の耳を切り取ったのかも、今になっては誰にもわからないことだろう。さらに、ゴッホ最大の理解者であり、金銭面での支援者でもあった弟のテオ・ファン・ゴッホ（ルパート・フレンド）が、耳切り事件を聞いて急いで病院に駆けつけてくれたものの、彼は来春の結婚を控えているため兄と一緒にアルルで過ごすことはできないらしい。しかも、黄色い家に住むゴッホに対しては、近隣住民から「オランダ人が精神状態が不安定で市民に不安を与えているから見張っていてほしい」との要望書が警察に提出されており、家主からも立ち退きを求められていたから、ゴッホが病院を退院しても、黄色い家に住み続けることは不可能になっていた。そんな状況下、ゴッホはアルル北東のサン＝レミの療養院に入った（ハッキリ言えば精神病院に半強制的に入れられた）のも仕方ない。

しかし、なぜゴッホはこんなことになったの？これは誰が見ても大きな悲劇のはずだが・・・。

■なぜこんな前向きなタイトルに？ゴッホは誰と対話？■

ゴッホの耳切り事件の「WHY」の答えがわからないのと同じように、ゴッホの死亡が事故なのか自殺なのかについてもわかっていない。そのうえ、ゴッホの作品が評価されたのは死後だから、ゴッホは不幸なまま死んでしまったと考えるのが普通だ。しかるに、シュナーベル監督は本作のタイトルを『At Eternity's Gate』としているから、アレレ。また、邦題の『永遠の門 ゴッホの見た未来』も、失意のまま死んでいったゴッホのイメージとは正反対で、前向きなものだ。それは一体なぜ？

それはシュナーベル監督が、本作ラスト直前のゴッホと聖職者（マッツ・ミケルセン）との対話シーンにおいて、「自分が新しい視点で世界を見ていることにしっかりと気付いており、他の画家とは違った方法で絵を描いていたこと」をしっかりと書き出しているからだ。イエス・キリストの生涯については諸説がある。また、キリスト教の教えについても、宗

派によってさまざまに分れている。しかし、彼の生涯、彼の教えについては、死後2000年以上も語り継がれている。しかして、イエス・キリスト本人は、自分が死ぬ時（殺される時）そんなことを予想していたの？そんな未来が見えていたの？それは本来あり得ず、イエスは張り付けにされ、不遇な状況下で死んでいったはずだ。それなのに、なぜイエスの死後、彼の教えがこれほど全世界に広がったの？

牧師の息子であったゴッホは、若き日には伝道師を志したこともあって、神については詳しくあったらしい。その結果、本作ラストの「静かなクライマックス」になる聖職者との病院での対話シーンでは、「イエスでさえ死後に認められたのだから」と確信的に語るゴッホの言葉にビックリ！それは、「自分の作品が自分が生きている間に認められないのは、イエス・キリストが生きている間に認められなかったのと同じ。しかし、自分はそれに悲観していない。なぜなら、自分の絵が自分の死後人々に認められるのは、イエス・キリストが死後人々に認められたのと同じだから」と確信していたことをハッキリ物語っているからだ。なるほど、これがシュナーベル監督のゴッホについての新視点、新解釈というわけだ。

本作に登場するゴッホの絵は、彼が生きていた時も亡くなった後ももちろん同じもの。しかし、その評価や価値（値段）は大きく変わっている。しかし、何も変わらないのはゴッホ自身。つまり、ゴッホ本人は自分が死亡する時、「他の画家とは違った方法で絵を描いていたこと」をハッキリ知っていたから、自分の作品の価値を信じていたわけだ。それが、本作におけるシュナーベル監督の主張だが、さてあなたは、その主張に納得？それとも・・・？

2019（令和元）年11月27日記